

森健志郎館長「坂本龍馬を語る」

高知県 建設／総合技術監理部門

右城 猛

(株)第一コンサルタンツ



1. まえがき

高知の桂浜には、和服姿に懐手をしたブーツ姿の龍馬像が、はるか太平洋の彼方を見つめるように立っている。龍馬の生誕90年の大正15年(1925)に、当時、早稲田大学の学生だった入交好保が「坂本先生銅像建設会」を発足。県内の青年たちから2万5千円(現在の金額で約1億円)を集めて建設した。台座には「建設者 高知県青年」と刻まれている。

坂本龍馬記念館は、龍馬の生誕150年を記念して、1985年に記念館設立実行委員会が発足。坂本龍馬像の建立と同じく青年らが10億円の募金を集め、1991年に開館した。

今年が開館20周年になる。それを記念して、11月13日に「シェイクハンド龍馬」の像が建てられた。

以前、県外観光客を呼び込む策として、坂本龍馬像の両脇に土佐勤王党の同志の武市半平太と中岡慎太郎のレプリカ像を設置する案



高知県の青年によって建設された坂本龍馬像

を高知県が出したことがあった。が、「桂浜は龍馬の聖地」と龍馬ファンから猛反発があり、中止に追いやられた。今や坂本龍馬は神であり、坂本龍馬記念館は龍馬を祀る神祕的な存在になっている。

2011年11月26日、日本技術士会四国本部の高知例会があった翌日、会員16名が桂浜に集合し、坂本龍馬記念館を自由見学した。その後、隣接している国民宿舎桂浜荘の地下1階の会議室で坂本龍馬記念館の森健志郎館長に、「坂本龍馬を語る」と題して60分の講演をしていただいた。

講演の内容を紹介させていただく。メモをとらずに聞いたので、私の記憶違いがあるや知れない。その節はご叱正をいただければ幸いである。

2. 龍馬伝

福山雅治が坂本龍馬を演じたNHK大河ドラマ「龍馬伝」の影響で、昨年の年間入館者数は、それまで14万人であったものが40万人を突破した。文学館としては、岩手県花巻市にある宮沢賢治記念館が全国屈指の年間15万～18万人である。それを超えて日本一になった。今年も昨年の余韻が残っていて入館者は20万人を超える。

龍馬記念館の大きな特徴は、県外のリピーターが多いこと。10回以上の来館が普通。入学、卒業、就職、結婚、退職など人生の節目、節目に来て龍馬に報告してゆく。高知県人は少ない。全体の5%程度である。



坂本記念館の森健志郎館長

3. 龍馬がゆく

龍馬のことを最も詳しく書いているのは、司馬遼太郎の「龍馬がゆく」である。トラック 2 台分の資料を基に書かれた。

土佐藩の下士であったので、脱藩するまでの記録は何も残されていない。記録があるのは、暗殺されるまでの 5 年間だけ。龍馬が書いた手紙は 140 通残されている。この内、姉の乙女宛の手紙は 18 通ある。

龍馬のことを知るには、「龍馬がゆく」を読むのが良いが、全 8 巻ある。時間がなければ乙女宛の手紙を読むことをすすめる(森館長は、乙女宛の手紙を紹介するときでも原稿を見ない。丸暗記されている)。

高知県人は龍馬についてあまり知らない。県外人から聞かれても語るができない。都会の人は、通勤時の電車の中で本を読むことができるが、高知では数分で職場に着く。夜は酒を飲まなければならない。本を読む時間がないのである。

4. 李登輝

台湾の元総督・李登輝が 2 年前、88 歳の時に奥さんと一緒に龍馬記念館に来た。

180 センチを超える長身。背筋をぴんと伸ばし、黒のスーツに黒のサングラスをかけて颯爽と現れた。まるでやくざの親分。「ニー・

ハオ」と中国語で挨拶をしようとしたところ、流暢な日本語で先に「森館長、お世話になります」と挨拶をされた。日本で教育を受けておられるので日本語がとても達者である。

職員は、李登輝の来館に備えて展示物を説明する準備をしていたが、説明を断られた。李登輝ご自身で奥様に説明された。とても詳しく、職員がメモを取るほどであった。龍馬だけでなく、枕草子など日本の古典文学もよく勉強されていた。

現在の政治の乱れについて意見を求めると、「龍馬のように志を持ち、命をかけられる政治家がいなくなった。私心があるといけない。総督の時に私は龍馬をお手本にした」と話された。

李登輝が訪問した所には、1 年後に台湾から多くの観光客が訪れる。昨年からは龍馬記念館にも台湾から観光客が大勢来るようになった。

5. 孫正義

龍馬生誕 175 年の前日に当たる 2010 年 11 月 14 日の日曜日、「高知市文化プラザかるぽーと」でシンポジウムを開催する企画があり、第 3 部の「明日へのメッセージ」で、ソフトバンクの孫正義社長と尾崎正直知事と私(森健志郎)で座談会を行った。

ホークスの野球の試合が福岡であり、それを孫社長も観戦されるという情報を得たので、福岡へ飛んで行って、座談会への出席をお願いした。10 分刻みのスケジュールで動いている超多忙な人であるにも関わらず承諾を得ることができた。「人間にとって本当の幸せとは何か」というテーマを気にいっていただき、出演を承諾してもらえた。

孫社長は、人生の転機や決断のとき、悩んだとき、全 8 巻ある司馬遼太郎の「龍馬がゆく」(文庫本)を少なくとも 5 回は読んでいる。16 歳のときに高校を中退してアメリカへ渡った。それを決断させたのは龍馬であった。



森館長の話聞き入る技術士の会員

苦しみから這い上がって家族を救い、みんなと同じ日本人であるということを証明するにはアメリカに行くしかなかった。

孫社長は、土佐を脱藩した龍馬と自分をダブらせているように思う。

6. 大政奉還

勝海舟は侍の家に生まれたが、身分が低くて貧しかった。出世するには大変な努力が必要であった。この経験から勝は、身分に関係なく良い意見であれば誰の意見でも採用した。公平の大切さを知っていた。

坂本家は高利貸しをしていたので金には不自由していなかったが、長宗我部氏の旧臣(下士)であったので、山内家の武士(上士)から差別を受けていた。この経験から龍馬は身分差別のない平等な社会を作りたいと願っていた。

幕末は、ペルーが黒船に乗って浦賀に来航した年から明治元年(1868年)までの15年間を指す。ジョン万次郎が日本に帰ってきたのは、大政奉還が始まる2年前。万次郎は、アメリカで民主主義や男女平等の概念に触れる一方、人種差別を経験していた。

勝海舟、坂本龍馬、ジョン万次郎の3人が出会ったことで歴史が動いた。大政奉還ができたのである。



坂本龍馬記念館の入り口に今年の11月13日に建造された「シエイクハンド龍馬」



坂本龍馬記念館の展示物を食い入るように眺める四国本部の技術士の皆様

7. あとがき

館長の講演を聴きながら、昔のことを思い出していた。私が読んだ「竜馬がゆく」は、全五巻「立志篇」「風雲篇」「狂瀾篇」「怒濤篇」「回天篇」からなる単行本であった。痛快で面白いので一気に読んだ記憶がある。

孫正義は5回読んでいます。高知県知事の尾崎正直は4回読んだそうである。最初に読んだのは、孫正義が15歳、尾崎知事が14歳。私は26歳の時に読んだ1回だけである。この違いが、彼らと私のその後の人生に大きく影響しているのかも知れない。

立志篇に「長州の伶俐、薩摩の重厚、土佐の与太」という表現がある。伶俐(れいり)は頭脳のよさ、重厚は太っ腹な心、与太はふざけた馬鹿話を意味する。高知には、利口ぶる堅物を毛嫌いする風潮がある。話を茶化すこ



森健志郎館長を囲んで記念撮影

とを好む。司馬遼太郎の描いた竜馬には、典型的な高知県人気質が見られる。高知の県民性から、龍馬の性格を推測したのでなかろうか。

森館長は、高知県技術士会の森直樹会員の実兄である。そのような関係もあって、高知県技術士会で2度講演をさせていただいている。今回で3度目になる。いつの間にか話の中に引き込まれていた。心の琴線に触れる言葉に感動して思わず涙が出そうになった。

講演の最後にお礼を述べようとしたが、私の感情が高ぶってしまって、しばらく言葉を発することができなかった。

謝辞

今回の見学会を企画・準備していただいた四国本部の明坂宣行・防災委員長，小川修・副事業委員長，そして森健志郎館長との連絡係をしていただいた実弟の森直樹会員に心より感謝申し上げます。



国民宿舎桂浜荘の売店で買った「龍馬の帽子」を被り、大ファンの坂本龍馬とシェイクハンドをされる薩摩生まれの塚本龍馬会員。

(2011年11月20日記)